

「オリーブ山での祈りと捕縛」

2023年11月23日

「父よ、御心なら、この杯を私から取りのけてください。しかし、私の願いではなく、御心のままに行ってください。」〔すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕（ルカ22：42～44）

「私は毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたがたは私に手出しをなかった。しかし、今はあなたがたの時であり、闇が支配しているのである。」人々はイエスを捕え、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。（ルカ22：53～54a）

主イエスは弟子たちと共にオリーブ山に向かわれた。目的の場所はマルコ、マタイ福音書では「ゲツセマネ」であったと記し、主イエスの宣教団は、ここを秘密の会合場所にしてきたようだ。主イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われ、ご自分は石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいて祈られた。「父よ、御心なら、この杯を私から取りのけてください。しかし、私の願いではなく、御心のままに行ってください。」この祈りに対し、「すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた」と注解が付記されている。天使が現れ、力づけた。神はいつも主イエスと共におられた。しかし、主イエスは苦しみもだえ、汗が血の滴るように地面に落ちるほど、真剣に祈られた。祈りの一つは「杯を私から取りのけてください」、十字架の苦しみを取りのけてくださいという祈りである。当時、十字架刑は頻繁に行われ、その過酷な苦しみは知られていた。この十字架の死から逃れたいと祈られた。もう一つは、十字架の苦しみから逃れたいという「私の願いではなく、御心のままに行ってください」という祈りである。一つ目の祈りと二つ目の祈りの間には結び合わない隔たりがあるが、一つ目の祈りを苦しみもだえて祈っているうちに、二つ目の神に委ねる祈りへと導かれていった。神の御心のままにという祈りに昇華されていったのではないか。平安を得て、立ち上がり、弟子たちの所に戻ってみると、彼らは眠り込んでいた。「なぜ、眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい」と言われた。主イエスの苦しみに弟子たちは全く気付いていなかった。

そこへ、イスカリオテのユダに先導されたエルサレム神殿当局者と衛兵たちが現れた。ユダは秘密の会合場所を知っているので、ここへ案内することができた。彼は主イエスに接吻しようと近づいた。主イエスは「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。愛と信頼を表す接吻を合図に捕縛をたくらんでいたのである。ユダは複雑に屈折した心を持っていたことが分かる。弟子たちは、主イエスが捕縛されると思い、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。そして、一人の弟子が大祭司の僕に切りかかって、右の耳を切り落とした。主イエスは「もうそれでやめなさい」と言われ、切られた耳に触れ、癒された。主イエスは、捕縛に来た祭司長、神殿の管理者、長老たちに、「私は毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたがたは私に手出しをなかった。しかし、今はあなたがたの時であり、闇が支配しているのである」と言われた。神殿では、民衆が主イエスを篤く支持しているので、手出しできないでいた。民衆のいないオリーブ山で、神殿当局が支配する闇の中で、主イエスは捕えられ、大祭司の家まで、引いて行かれた。ユダは真夜中、神殿当局と交わした主イエスを引き渡す密約を成し遂げたのである。